

<p>団体名</p>	<p>NPO法人南大阪サポートネット</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>子どものまゆごもりを応援する 苦しむ親の変化を促し仲間が支える恩送り</p>	
<p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p>■活動風景</p>	
<p>●望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>子どもが丸ごと存在として認められ、自分が感じて考えたことを基に決めて実際に行動でき、結果を受けて学びながら生きてゆける社会。不登校・ひきこもり・発達特性・精神疾患・LGBTQ・社会的養護・被虐待・貧困など多様な存在がそのまま認知され、社会のチームの一員として頼られ、体験を通して得た力を発揮しながら構成してゆく。 大人は時代背景による世代間の違いや価値観・主義主張の違いがあっても、子どもたちを見守り、求められれば手伝い、応援し、生きやすい社会にして手渡そうとしている。</p>		<p>ピアサポートグループで2グループに分かれて、ファシリテーターの進行で相談しあう保護者とピア相談員の様子</p>	
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>当団体の社会的役割は「子どもも大人も丸ごと認められ尊重される地域社会づくり」であり「生きづらさを抱えた子どもや人」に寄り添い一緒に考え歩いてゆく。行動指針は「おたがいさま」で、未来の子どもたちへの恩送りである。 具体的には以下の取り組みを推進する。 1) 不登校ひきこもり状態に益するリソースを集め、学びと交流・多様なチャレンジができる居場所を維持運営する。 2) 社会に公正な理解を促す発信をする。ピアサポートグループを作り、楽になる体験を通して活動への参画をいざなう</p>			
<p>●団体の活動基盤</p>	<p>・人的資源：広報とファンドレイジング等の助言・協力者を探す。会員から参画側になるよう人をいざない共に育つ。 ・物的資源：居場所兼事務所を安定して活動できる物件に移転できるように探す。事業で活用する食材や物品等の寄付受付のシステム化を模索する ・活動資金：会員の増加（16名→30名）自主事業の採算化にチャレンジする ・関係者とセオリーオープンチェンジの構築：まず類似他団体と連携する中で目標とする成果について検討する。さらに社会協議会・CSW・教育委員会との連携を増やす</p>			
<p>■活動報告</p>			<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>●ピアサポートグループ（相談会）の実施 子どもが学校や社会から離れて不登校やひきこもり状態の保護者が、安全が保障され安心して実情や悩みを語りあう交流と相談の場を開催した。孤立や不安が和らぎ、地域の情報や選択肢を知ることができる。 ●応援連続講座（9回）の実施 保護者が自己理解を深めて、子どもの状態を理解し、家庭での循環をより良いものにしてゆけるように9段階で構成している。受講者は親と子の互いの境界線を意識し、最も身近な支援者としての視点を知ることができた。 ●ピア相談員による個別相談の実施 ピアサポートグループや応援連続講座の参加後に継続して心理的な支援を得られる。専門家の心理療法と違い、同じ体験をし実情の解る先輩のカウンセラーが「仲間として傾聴し、一緒に考える」コーチングの要素もあるサポートを実施した。 ●類似団体との協働。ピア相談員の研修参加と資格取得。ボランティアとスタッフの研修実施した。</p>			<p>「不登校ひきこもり状態の子どもを持つ保護者に、安全なつながりと学び直し場の場を提供し、変化に寄り添い応援する」という目標に対して ●ピアサポートグループ（相談会）はテーマを決めて（先輩保護者の体験談、集い、学習会など）年間13回実施した。参加者の87%が満足。近隣市施設や公共施設も使ってミニコミ誌等で広報し、孤立している人にも参加しやすい機会提供をした。 ●保護者のニーズに合わせた『学びと心理的支援をおこなう応援連続講座（9回）』を実施。「自己理解や子ども理解が進んだ」「問題を解こうとして逆に悪化させるパターンに気づいた」「家族間の循環を変えてゆける」などの感想が70%あった。効果測定は6段階30項目のアンケートによる比較。 ●ピア相談員による個別相談は38回実施。講座参加との相乗効果で、考えや心身の整理を手伝った。親の歩みと子どもの状態の変化を表す4段階のルーブリックで60%が1段階以上UPした。 ●類似団体と講座開催やピアサポートグループの開催で協働できた。相談員は資格を取得し、スタッフ・ボランティアの研修も実施した。</p>	
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>●類似団体と協働して様々なやり方を試すことで、想定とは違う保護者の動きやニーズも知れた。孤立状態の保護者への情報の届け方、開催場所の利点・注意点や連携方法など今後活かせる。 ●近隣の大学院の協力により、統合的心理療法を用いた講義とグループワークと仲間とのシェアリング＝「保護者の包括的な学び直しと心理的支援」という実験的な連続講座を実現した。専門家によるアンケートにより、めざす状態像を言語化して共有できた。 ●外部のカウンセラーの協力により「相談室」を開設し、相談事業に必要なマニュアル作りの基礎が得られた。通常のカウンセリングとは違うピアサポーターならではの相談のノウハウを得られた。元保護者が経験的に知っていた「親の歩みと子どもの状態の変化」について、協力してルーブリックを作成することで保護者が自身の状態を確かめやすくなった。</p>			<p>不登校やひきこもり状態の子どもの多くは、最大限に努力して学校や地域社会への適応を試みるものの、ストレスの多い環境、ネガティブな出来事などの様々な要因が重なり、自分を守り生き延びるために「まゆごもり」状態となる。それは本人の責任を問うものではなく誰にでも起こりえることで、自傷行為・自殺・摂食障害などと同列である。しかし社会規範の中で暮らす保護者の多くは「あたりまえ」「ふつうは」という価値観を持ち、子どもの状態を理解できず、周囲や専門家にも親の責任とされて孤立し苦しむことが多い。生活環境を担う家庭で二次症状を起こしたり長期化させずに、子どもが自身の課題に取り組むためには、保護者の学び直しと心理的支えのある包括的な支援が不可欠である。また、実情を理解する専門家や機関担当者や地域住民を増やすことが課題である。これらの為に ・家族環境の見える化→悪循環パターンがあれば気づける学びと変化を共に支える仲間 ・孤立を防止→実情を理解した担当者のいる窓口 ・地域に公正な理解を促す 等の必要がある。</p>	
<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>近隣の類似団体との協働により、当該地域で不登校やひきこもり状態の子どもがいる保護者に有効な支援を実践すること を達成しました。</p>
<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>子どもが不登校やひきこもり状態になって傷つき孤立していた保護者につながることができました。保護者が学んだり聴いてもらったり仲間との交流で楽になることで、家庭内に新しい循環が生じることがありました。</p>	